

[課題演習概要]

自己の生き方を高める道徳科学習
—自己成長ノートの活用を通して—

加藤 嵩也
Shuya KATO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
小学校教員免許状取得プログラム

(2023年1月10日受理)

キーワード：道徳科学習，ワークシート，振り返り，フィードフォワード

1 研究の目的

道徳科学習では、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤に、自己の生き方についての考えを深めることが大切だ⁽¹⁾。

しかしこれまでの道徳科学習では、「振り返り」で「〇〇(教材内のキーワード)を頑張りたい」といった「自己」から「教材」へ一方向的な記述が見られた。これでは「自己の生き方についての考えを深める」ための手立てとしては不十分である。

そこで「これまでの自己の姿を踏まえ、授業を経て道徳的価値のよさを実感し、これからのよりよい自己の姿を具体的に思い描くこと」を「自己の生き方を高める」とし、そのための手立てが必要であると考えた。よって本研究では子供が道徳科学習を通して自己の生き方を高めるため、より効果的なノートの作成・活用を目指す。

2 研究の計画

10月	実践成果の分析、まとめ
11月	他の価値項目等での構想
12月	ノートの改善・提示、授業実践

3 研究の内容

(1) 研究の概要

子供が「自己の生き方を高めている」要素には、「これまでの自己の生き方の受容」「価値に対するよさの理解と憧憬」「これからの自己の生き方の構想」の3つがあると考えます。そしてこれらの要素

が子供の中で蓄えられていくことで、道徳的実践へ繋がりやすくなると考える(図1)。

要素	内容	子供の言葉
受容 ありのままの姿	これまでの自己のありのまま生き方を素直に受け容れること。	経験からこの心が大切だと思うな。
憧憬 あこがれの姿	価値に対する大切さを理解し、そのよさを実感すること。	こういう心も大切になってくるんだな。この考え方はいいな。
構想 ありたい姿	これからの自己の生き方について具体的に思い描くこと。	これからこういう場面でこの考え方を生かしていけそうだな。

「自己の生き方を高める」ための手立てとして、「自己成長ノート」を作成・活用する。「自己成長ノート」は、授業用のワークシートと一体化させ、授業全体を通して自己にベクトルを向けるためのノートとする。

「振り返り」について田村(2018)は、「学習内容を自らとつなげ自己変容を自覚する」機能があり、「深い学び」に大きく関係してくるとしている⁽²⁾。よって、授業前後で考えを比較できる構成とし「自己変容の自覚」を意識的に行えるようにする。

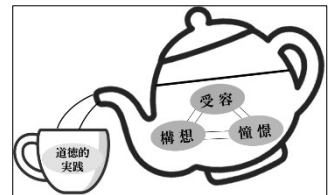


図1：3つの要素のイメージ

行橋市立稗田小学校では、子供がいかに道徳的価値の理解を深めようとしていたか、自分との関わりで考えたかなどを見取るための「成長シート」を用いた実践を行っている。そこではウェビングマップと「いままでは」「これからは」「かわったことは」を記述するための欄が設けられている⁽³⁾。

(2) 自己成長ノートの作成 (記述内容)
以上を踏まえ、図2のような自己成長ノートを作成した。「I 授業前の自己」「II 授業を経た自己」「III これからの自己」の3部で構成し、「I 授業前

の自己」では、授業前に価値に関するこれまでの経験や考えを記述する(受容)。「II 授業を経た自己」では、展開後段でIと同じく価値に関する自己の考えを記述する(憧憬)。「III これからの自己」では、終末段階で自己の変容を踏まえてこれからどのように生きていきたいかを記述する(構想)。

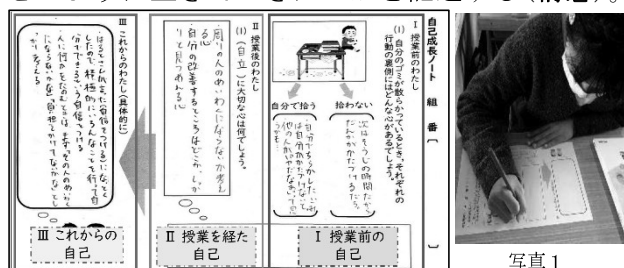


図2: 自己成長ノート

写真1
自己成長ノートに
記述する子供

(3) 自己成長ノートの活用 (よさ)

「子供にとってのよさ」には、教材と出会う前の考えを、経験を基に自覚できること(受容)。授業前後の価値に対する考えの変容を一枚で比較し自覚できること(憧憬)。これからの「よりよい自己」を具体的に思い描けること(構想)がある。

一方「教師にとってのよさ」には、価値に関する子供の経験や考え(受容)の実態を把握し、発問計画に生かせること。授業を経た価値に関する考えの変容(憧憬)や、子供の具体的なフィードワード(構想)を見取れることがある。

(4) 授業実践

- 対象：公立K小学校第6学年A組 (29名)
- 内容項目：A-3 節度、節制
- 主題：自分の生活を見直す
- 教材：「お母さん、お願いね」(東京書籍)

授業実践では「自立できないことが与える周囲の人への影響に気付き、これからの自分の生活を見直し改善しようとする態度を育てる」ことをねらいとした。以下、「自己成長ノート」を活用するにあたっての具体的な内容を示す。

I. 授業前の自己 (受容)

授業の前週、自立に関する場面を例に挙げ、その行動の背景にある心について自己の経験も想起させながら記述させた。そしてその記述された内容について授業の導入段階で共有し、授業前の自己の考えを受容する機会を設けた。

すると「やりたいことを優先する心」や「周囲の迷惑を考える心」などの記述があり、授業前に考える弱い心や必要な心を表すことができている。

展開前段では教材を批判的に活用し、中心発問では「分かっているもついで弱い心に流されてしまうことを踏まえ、主人公が大切にすべきだった心や考え方」について話し合う活動を設けた。

II. 授業を経た自己 (憧憬)

展開後段では「自立に向けて共通して大切となる心は何か」を記述させ、授業内で価値のよさを理解し憧れをもった心を記述する機会を設けた。

すると「自分でできることに自信をもつ」「自分に甘えずできることは自分で行う心」など授業中に触れた他者の意見を踏まえながら自立に大切だと感じた心や考え方を記述することができていた。

III. これからの自己 (構想)

終末段階では「授業を通して理解した価値のよさや大切な心を生かしてどのようにこれからの生活を送りたいか」について記述させ、これからの自己を具体的に構想する機会を設けた。

すると、「自分の身のまわりをきれいにする」、「お母さんに様々なことをして貰っているので、自分でやって少しでもお母さんの負担を減らしたい」など、これからの自己の姿について具体的に記述することができていた。また、授業後には机の横に掛かっている道具を片づけたり落ちている私物を拾ったりする様子が見られた。このことから、これまでの自己や、授業を経て考えた大切な心を踏まえて、道徳的实践に向けた具体的な構想をすることができているといえる。

以上のことから、授業ワークシートと一体化させた自己成長ノートを活用することは、「自己の生き方を高める」ために効果的であったといえる。

4 成果と課題

(成果○課題●)

- 「受容」「憧憬」「構想」の段階を意図的に仕組むことで、自己にベクトルを向けて考える機会をスムーズにつくることができる。
- 価値そのものに対する発問が難しい場合は、具体的な行動場面を例として挙げて考えさせることで、自己の経験の想起を促すことができる。
- 友達の考えをメモする余白をワークシートの面に設けるなどして、友達の考えを取り入れやすくする工夫を行うこと。

主な引用・参考文献

- (1)文部科学省 2019「小学校学習指導要領(平成29年度告示) 解説特別の教科道徳編」廣済堂あかつき
- (2)田村学 2017『深い学び』東洋館出版
- (3)福岡県行橋市立稗田小学校 2021「自己を見つめ、よりよい生き方を考える子供を育てる道徳科学習指導～体験的な学習と成長ノートの工夫を通して～」研究発表会要録